



随筆の味わい

枕草子・徒然草

- 目標**
- 歴史的仮名遣いに注意して、言葉の意味を正確に読み、作者の思いを想像する。
 - 作者のものの見方や考え方に対して、自分の考えをもつ。

『枕草子』は平安時代に清少納言によって書かれました。一条天皇の中宮定子に仕えた時の体験や、テーマごとに連想される物事、自然や人の言動について感じたことなどが三百ほどの章段につづられています。こうした性格の作品を現在では「随筆」といい、『枕草子』は、『方丈記』『徒然草』とともに三大随筆と呼ばれています。

枕草子 清少納言

春はあけぼの

春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。



清少納言 (上村松園)

▼ 随

▼ 枕

清少納言

九六六?—?

中宮 平安時代は、天皇のきさきをさして用いた。

山ぎは 空の、山に接している部分。

紫 現在の紫に比べると、赤みが強い。

(135ページ)

▼ 蛍

山の端 山の、空に接している部分。

▼ 霜



夏は夜。月の頃はさらなり、闇もなほ、ほたる 螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮れ。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、からす 烏の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。

(第一段)

春はあけぼの。だんだんと白くなっていく山ぎわが、少し明るくなって、紫がかつた雲が細くたなびいている(のがいい)。

夏は夜。月の眺めのよい頃はいうまでもない、(月が出ていない)闇の夜もやはり、螢がたくさん飛び交っている(のがいい)。また、ただ一つ二つなど、ほかに光って飛んでいくのも趣がある。雨などが降るのも趣がある。

秋は夕暮れ。夕日がさして、山の端にたいそう近くなった頃に、烏が寝ぐらへ行こうと、三つ四つ、二つ三つなど急いで飛んでいく様子までしみじみとした感じがする。まして雁などが列になって飛んでいるのが、大変小さく見えるのは、とてもおもしろい。日がすっかり沈んでしまつて、風の音や、虫の音など(が聞こえてくるのも)、また言いようもない(ほど趣がある)。

冬は早朝。雪が降り積もつたのはいうまでもない、霜(降りて地面が)たいそう白くなつてるときも、またさうでなくても、大変寒い朝に、火などを急いでおこして、(侍女が)炭を持ち運ぶ様子も、いかにも冬の早朝らしい。昼になって、(寒さが)だんだんゆるんで暖かくなつていくと、火桶の火も、白い灰が多くなつてきてよくない。

うつくしきもの

うつくしきもの。瓜うりに描かきたるちごの顔かほ。雀すずめの子の、ねず鳴きするに踊り来き。
（人が）チュツチュツとねすみの鳴きまねをすると、踊るようになってやってくる

二つ三つばかりなるちごの、急いぎて這はひ来る道みちに、いと小さき塵ちりのありけ

るを、目めぎとに見みつけて、いとをおかしげなる指ゆびにとらへて、大人おとなごとに見みせた

る、いとうつくし。頭かしらは尼あまそぎなるちごの、目めに髪かみのおほへるをかきはやらで、
（オ）（エ）

うち傾かたぶきて物ものなど見たるも、うつくし。
（第一四五段）

首をちよつとかしげて

髪がかぶさっている かきあげることほしないで

（第一四五段）

5

『枕草子』には烏や雀の子、はいはいして近づいてくる幼児といった、現代の私たちにも身近な動物やできごとが生きて描かれています。

こうした視点や感性は、『古今和歌集』にみられるよ

うな、散り行く桜に春を惜しみ、ほととぎすの声を待ち

つつ夏の夜を明かし、秋には月や紅葉を愛めで、冬には雪

の美しさを樂しむといった、伝統的な美意識とは異なる、

新しい捉え方でした。

10



右側の子どもの髪が尼そぎ
（『雪月花』より「花」 上村松園）

（135ページ）
火桶 木製の火鉢。

侍

うつくし 主に幼いもの

のや小さいものに対して、

かわいい、愛らしいと思

う気持ちを表す。

ちご 乳幼児。子ども。

をかしげ いかにも「を

かし」と感じられる様子。

「をかし」は、心がひか

れ、おもしろい、美しい、

かわいらしいと思う気持ち

を表す。

尼そぎ 髪を肩のあたりで切りそろえること。

▼尼

《出典》『新編日本古典文学全集18 枕草子』によった。



徒然草

兼好法師けんこうほうし

兼好法師が『徒然草』を著したのは、鎌倉時代末期です。兼好法師はこの時代を代表する歌人で、『古今和歌集』『枕草子』『源氏物語』といった王朝文化に強い憧れを抱きました。『徒然草』には、自然・人生・社会などについて多様な視点が示され、この時代ならではの文化や、いつの時代にも変わらない人々の姿も描かれています。

つれづれなるままに、

5

日暮らし、硯すずりに向かひ

て、心にうつりゆくよ

しなしごとを、そこは

かとなく書きつくれば、

あやしうこそものぐる

10

ほしけれ。

(序段)

特にこれといつてすることもないままに、一日中、硯に向かつて、心に次々と浮かんでは消えていくたわいもないことを、とりとめもなく書きつけると、妙に気持ちがおかしくなりそう



兼好法師

兼好法師

一 二八三? — 一三五

二? 『徒然草』は序段と二四三の章段からなる。

鎌

源氏物語 平安時代に紫式部むすしきぶによって書かれた長編の物語。

仁和寺にある法師

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ、心憂く覚えて、ある時思ひ立ちて、ただ一人かちより詣でけり。極楽寺・高良などを拜みて、かばかりと心得て帰りにけり。

さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りしは、なにごとかありけん、ゆかしかりしかど、神へ参ること本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。

(第五二段)

10

5

仁和寺にいる法師が、年をとるまで石清水八幡宮を参拝したことがなかったの、残念に思い、ある時思い立って、たった一人で徒歩でお参りした。(山の麓にある) 極楽寺や高良神社などを拜んで、(石清水八幡宮は) これだけと思ひこんで帰ってしまった。

さて、仲間に向かつて、「長年の間思っていたことを、果たしました。聞いていた以上に、厳かであらうしやいました。それにしても、参拝している人々がみな山へ登ったのは、なにごとがあったのだろうか(私も)知れたかったけれど、神へお参りすることこそが本来の目的であると思つて、山の上までは見なかった。」と言つたことであつた。ちよつとしたことにも、その道の案内者はあつてほしいものである。



石清水八幡宮

仁和寺 京都市右京区御室にある、真言宗の寺。
石清水 石清水八幡宮。京都府八幡市の男山にある。その麓に、極楽寺と高良神社があったが、極楽寺は焼失した。
かち 徒歩。当時、京から石清水へは、桂川・淀川を下る船便が一般的だった。



奥山に猫またといふものありて

「奥山に猫またといふものありて、人を食らふなる。」
人里離れた山に猫またというものがいて
人々を食うそうだ

と、人の言ひけるに、「山ならねども、これらにも、猫の経上がりて、猫また
(ある)人が言ったところ
山ではなけれども
年を経る変化して

になりて、人とするはあなるものを。
(アンナル)
人をつまらえることが
あるということなのに

と言ふ者ありけるを、何阿弥陀仏とかや、連歌しける法師の、行願寺のほと
なにあみだぶつ
れんが
ほぶし
ぎやうぐわん
キョウガン

りにありけるが聞きて、一人歩かん身は心すべきことにこそと思ひける頃しも、
住んでいた法師が聞いて
一人歩きをする自分は用心しなければならないことと
ちやうどその頃

ある所にて夜更くるまで連歌して、ただ一人帰りけるに、小川の端にて、音に
夜が更けるまで
ただ一人て
こがは
はた
うわさに

聞きし猫また、あやまたず足もとへふと寄り来て、やがてかきつくままに、首
聞いた
狙いどおり足もとへすつと寄って来て
いきなり
飛びつくやいなや

のほどを食はんとす。肝心も失せて、防がんとするに、カもなく、足も立たず、
(その法師は)正気も失ったために
防ごうとするけれども

小川へ転び入りて、
転げ込んで

「助けよや。猫また。よやよや。」
助けてくれ
猫まただ
おういおうい

(138ページ)

かたへの人 仲間。

先達 案内する人。

猫また 年老いた猫で、尾が二つに分かれているという想像上の動物。

何阿弥陀仏とかや 当時は、「——阿弥陀仏」と名前をつけることが流行した。

連歌 和歌の上の句(五・七・五)と下の句(七・七)にあたるものを別の人が作り、交互に続けていくもの。

行願寺 現在の京都市上京区にあった寺。

小川 行願寺の付近を流れていた川の名。



と叫べば、^{(エ) (エ)}家々より、^{(イ) (イ)}松ども灯して走り寄

りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。

「こはいかに。」
これはどうしたことだ。

とて、川の中より抱き起こしたれば、^{(オ) (オ)}連歌
と言つて

の賭物取りて、^{(カ) (カ)}扇・小箱など懐に持ちた
賞品を取つて（その賞品の）扇や小箱などを懐に持つていたのも

りけるも、水に入りぬ。^{(キ) (キ)}希有にして助かり
^{(ホ) (ホ)}（ホウホウ）
かろうじて助かった様子で

たるさまにて、^{(ク) (ク)}這ふ這ふ家に入りにけり。
這うようにして

飼ひける犬の、^{(ケ) (ケ)}暗けれど主を知りて、飛
^{(コ) (コ)}（実は、その法師の飼つていた犬が、暗いけれど主人とわかつて

びつきたりけるとぞ。
（第八九段）



『絵本 徒然草』

懐 着た着物の、胸も
との内側の部分。

《出典》『新編日本古典文
学全集44 方丈記 徒然
草 正法眼蔵随聞記 歎
異抄』によつた。

千みちしるべ

枕草子

内容を捉えよう

- 1 「春はあけぼの」と「うつくしきもの」の二つの章段を、歴史的仮名遣いに注意して音読しよう。

読み深めよう

- 2 清少納言は、どんなものを「をかし」「うつくし」と感じたか、あげよう。
- 3 『枕草子』に描かれたもののうち、現代の私たちにもなじみ深い動植物や季節の風景を複数あげよう。

自分の考えを伝え合おう

- 4 「春はあけぼの」の章段を参考にして、好きな季節について文章にまとめたり、「うつくしきもの」の章段を参考にして「ものづくし」の文章を書いたりしよう。

《題材例》

「好きな季節」

春の花は白梅、菜の花、山桜。香りよく、色鮮やかだ。
「好きな食べ物」

春の野菜。みつば、たけのこ、ふきのとう。苦みと香りもおいしさのうち。

フルーツは、りんご、いちご、ブルーベリー。その味がとてもよい。

「あつたらしいもの」

「夢中になれるもの」

清少納言になったつもりで書いてみよう。



《生徒作品例》



秋は赤。
木々は紅葉し、
振り向けば、
海に落ちる夕日が、
友の顔を赤く染める。

徒然草

内容を捉えよう

- ① 「仁和寺にある法師」と「奥山に猫またといふものありて」の二つの章段を、歴史的仮名遣いに注意して音読しよう。

読み深めよう

- ② 「仁和寺にある法師」を読んで、法師が石清水八幡宮に行かないで帰ってしまった理由を考えよう。
- ③ 「奥山に猫またといふものありて」で法師が「飼ひける犬」を「猫また」と誤解した原因は何か、話し合おう。

自分の考えを伝え合おう

- ④ どんなどきに「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。」(P 138 L 10)と思うか、自分たちの経験を話し合おう。

振り返り

- 現代語訳を手がかりに作品を読み、作者のものの見方、感じ方の特徴を理解しているか。
- 作者の考えに対して、自分の考えをもっているか。

この教材で学ぶ漢字

134 随 ズイ 付随

134 枕 まくら 枕もと

135 蛍 ケイ 蛍光灯
ほたる 蛍狩り

135 霜 しも 霜柱

135 侍 ジ 侍医
さむらい 若侍

136 尼 あま 尼寺

137 鎌 かま 鎌刈る

新出音訓

135 交★う (かう)

……
138 嚴★か (おごそか)

漢字の練習 3

1 次の——線部の平仮名の言葉を漢字で書こう。

- (1) 橋桁をほきようする。
- (2) 僅差で試合にやぶれる。
- (3) 職人のぎほうを模倣する。
- (4) てんきよほうでは大雨の虞がある。
- (5) 皮膚をせいけつに保つ。
- (6) 昨年の雪辱をはたす。
- (7) 痛めた肘をなおす。
- (8) 城の本丸御殿をさいけんする。
- (9) 奴隷解放のれきしを学ぶ。

2 次の言葉の読みを平仮名で書こう。

- (1) 瓦屋根
- (2) 尿検査
- (3) 氾濫
- (4) 藩政
- (5) 鍋蓋
- (6) 盲導犬
- (7) 大気圏
- (8) 享受
- (9) 顕著
- (10) 箇所
- (11) 酪農
- (12) 頻度

15

10

5

この教材で学ぶ漢字

隷 レイ 奴隷	奴 ド 奴隷	殿 テン どの殿様・○○殿 御殿 殿堂	肘 ヒジ 肘を痛める	辱 ジョク 屈辱	膚 フ 完膚なきまで	虞 オソレ 大雨の虞がある	倣 ホウ 模倣	僅 キン 僅かな時間	僅 キン 僅少	桁 ケタ 桁違い
顕 ケン 顕微鏡	享 キョウ 享年	圏 ケン 北極圏	盲 モウ 盲導犬	蓋 ガイ 頭蓋骨 火蓋	藩 ハン 藩主	濫 ラン 濫用	氾 ハン 氾濫	尿 ニョウ 尿意	瓦 カワラ 瓦版	
衡 コウ 平衡	堆 タイ 堆積物	峽 キョウ 地峡	逐 チク 逐次	骸 ガイ 形骸化	蔽 ヘイ 隠蔽	遮 シヤ 遮光 さえぎる音を遮る	頻 ヒン 頻出	酪 ラウ 酪農家	箇 カ 箇条書き	

- (13) 遮蔽
- (14) 残骸
- (15) 逐一
- (16) 海峡
- (17) 堆積
- (18) 均衡